

仁和寺蔵『今様之書』と乱拍子の鼓

高桑いづみ

「道成寺」前半のクライマックスとなる「乱拍子」は、動きと音を極端なまでに切り詰め、小鼓の張りつめたカケ声にあわせてわずかな足遣いを見せる特異な舞である。鎌倉時代に流行した白拍子舞との関連性を指摘されて久しいが、その原初の芸態はいまだ解明されていない。昨秋、「乱拍子」と白拍子の囃子について私論を述べる機会があったので、今回それを敷衍させて考えてみたい。

白拍子の芸態を具体的に記したものに、仁和寺蔵の『今様之書』がある。舞い方から順を追って見てみよう。「一反マハリテノチ、左ノ手ヲ前エサシ出シテ同アシフミシテ、白拍子ヲウタイ出也。謡ノトキモ同之」とあるので、舞台を一周した後、左手を前に差し出して足踏みをしてから白拍子謡を謡だしたらしい。

謡い方に関しては、ユリが口伝、と記し

た箇所がある。「一句ノ終ニ文字一ツヲキテユル、ノチノ一ノ文字ヲハハネアケテ」とあるので、一句ごとの区切りをはっきりさせていたようだ。「道成寺」のように一句づつ区切り、間をあげて謡った可能性も充分考えられる。

このように見ていくと、「乱拍子」はかなり忠実に白拍子の芸を模倣しているようだ。囃子はどうだったのだろうか。「鼓ウツベキ様」として次のような記述がある。

白拍子者(傍線は筆者)

打出シノ音ヨリ、ト、ウツトウト打也。

後ハ、タンツトウトウトウト打也。

セメハ、謡ノ始一ヘンハ二拍子也。

タンツタンツトウトウトウ、也。後ハ、

タントウトウトウトウトウ、也。

乱拍子、同之様ニ打也。…後略…

擬音風に「ト、ウツトウ」「タンツトウトウ

ツトウ」「タンツタンツトウトウトウ、」「タ

ントウトウトウトウトウ」とパターンを記しているが、おそらくこの四つのパターンを繰り返して打ったのだろう。現行の鼓の唱歌とは異なるが、能でもかつて乙(ボ)をトと呼んでいたし、タンは現行の頭(タ)、ツは音のない間か現行の甲(チ)と考えられるから、なんとなくリズムのイメージは想像できよう。

こうしたパターンをながめていて気がついたのだが、どうも「トウツトウ」が基本パターンらしい。たとえば一つめは「ト・トウツトウ」と基本パターンに「ト」を加えた形、二つめは基本パターンの上に「タンツトウ」を加えた形、責メ以降の手でも「タンツタンツ」あるいは「タントウ」など、いづれも基本パターンの冒頭に音をプラスする形になっている。

実は、能にもこのような構造を持った囃子がある。翁付きの脇能でワキの登場に奏する「置鼓」がそれである。左に幸流の手付を示したが、「置鼓」でも基本パターンを繰り返す際、冒頭部分を入れ換えたり別の粒をつけ加えて変化をつけている。その形が「今様之書」にそっくりなのだ(傍線は基本パターン)。

*パターン1 ヤ・ハ○・ヤ○ハ○ハ○

ヤ・ハ○・ヤ○ハ○

*パターン2 ハ○ヤ・ハ○・ヤ○ハ○

ハ○ヤ・ハ○・ヤ○ハ○

*パターン3 イヤ△ハ○・ヤ○ハ○

ハ○ヤ・ハ○・ヤ○ハ○

*パターン4 ・・⊖○○ハ○ヤ・ハ○

・ヤ○ハ○ハ○ ヤ・ハ○・ヤ○

ハ○ △イヤ△ハ○・ヤ○ハ○

ハ○ ヤ・ハ○・ヤ○ハ○ハ○

ヤ・ハ○・ヤ○ハ○

「置鼓」は『申楽談儀』にも出てくる古い囃子事である。笛と小鼓という編成からもうかがえるように、観阿弥・世阿弥以前の、まだ大小がコンビを組んで複雑な体系を作り出す以前のスタイルを濃厚に引きずっている。白拍子の囃子に近いのも、偶然ではあるまい。

ところで、「乱拍子」については古くから「置鼓」との関連性が指摘されてきた。観世宗家蔵の『五音三曲』には「ランピヤウシノコト、ヒヤウシヲツナガズ、ヒツキリくウツ故ニランピヤウシトハ申也。ヲキツ・ミノミダレナリ」と書かれているし、同じ様な記述は『八帖花伝書』巻四にもある。従来から指摘されてきたことだが、「乱拍子」の手を間をあげずに打ったら「置鼓」

になる、といつても過言ではないほど両者の関係は深い。

このあたりで整理しておこう。『今様之書』の囃子は「置鼓」と構造が共通しており、「置鼓」の手は「乱拍子」に酷似していた。つまり「置鼓」を接点とすることで、白拍子と「乱拍子」のつながりが明確になってくるわけだ。

ここで問題になるのが、白拍子と乱拍子の相違点である。先に引用した通り、『今様之書』では両者の鼓の打ち様は同じ、と書かれていた。が、名称が異なる以上どこかが違っていたはずである。もう一度『今様之書』に戻ってみよう。実は、打ち様は同じ、と記した後に「相腹絲縉乱拍子之秘曲也。同鼓之、イサ、カツ、ミノモ秘曲在之可口伝之。」とつけ加えられていた。乱拍子の中に特殊な囃し方をする秘曲、「相腹絲縉」があつたのだ。『今様之書』を翻刻した『日本庶民文化史料集成』の補注では「相腹絲縉」を「相腹」と「絲縉」の二曲と考へ、このうちの「絲縉」を『興福寺延年舞式』などに見られる「絲縉」か、と推測している。具体的なりズムは不明だが、「絲縉」も鼓を伴奏とする歌舞である。実は、その「絲縉」が能ともかわっていたらしい。

鴻山文庫蔵『拍子秘書』に、多武峰で舞われた「翁」のヴァリエーション「法会之舞」についての記事があるのだが、そこに「鐘巻の乱拍子より少かるし。…中略…舞台にても御前にも御所望の時ハかいこより前二有之。ゑんねんの舞のいとより少静也。…後略」と書かれているのだ。「法会之舞」は、翁舞の代わりに乱拍子を舞う多武峰独自の演出である。その「乱拍子」が「ゑんねんの舞のいとより」に近い、という内容だったのである。

思えば「鐘巻」に「乱拍子」を取り入れて「道成寺」へ改作したのは、多武峰でのことである。多武峰では新作能を上演する習慣があり、「乱拍子」は新しい趣向として考察されたのだが、そこはまた延年が頻繁に催される場でもあつた。延年で舞われた「絲縉」が「乱拍子」の成立に関わった可能性は十分に考えられよう。

これまでさまざまな点で「乱拍子」と白拍子の共通性を指摘してきたが、それだけでは「乱拍子」の特殊性を説明できなかつた。特異な囃子「乱拍子」が誕生するには、秘曲「絲縉」の存在が不可欠だったのである。

(東京国立文化財研究所芸能部主任研究官)